

TMR 施設事例 2

八代TMRセンター（事例：地域の資源を利用したTMR）

熊本県は西日本一の酪農地帯です。近年、牛の飼料となる輸入穀物の価格が上がり、酪農経営を悪化させるようになりました。そこで、飼料の低コスト化や各農家での給餌作業の負担軽減を目指し、八代 TMR センター（熊本県酪農業協同組合連合会）がつけられました。八代 TMR センターは、1日当たり最大 55トンの TMR を製造できる飼料混合設備（写真参照）を備え、搾乳牛用、育成牛用の TMR を熊本県内各地の農家に供給しています。八代地域は水田が多いことから周辺地域で作られる飼料用イネ（籾と茎葉を同時に飼料として利用するもの）や飼料用米（籾または玄米を濃厚飼料として利用するもの）、イタリアンライグラス、さらに果汁や豆腐の残り粕などの食品副産物も使用し、国産飼料にこだわった TMR の生産を行っています。

飼料用イネは、熊本県内で多く栽培されています。熊本県の飼料用イネの作付面積は5,034ha(平成24年度)で、全国生産量の2割近くが熊本県で生産されています。飼料用イネは牛が好んで食べ、栄養価も高いことから、輸入している乾草の代わりにのえさになります。

飼料用米は、平成20年頃から熊本県で本格的に作付けが始まり、生産量は年々増えています。飼料用玄米は嗜好性が良く、輸入トウモロコシとほぼ同等の栄養価があるので、乳牛用の濃厚飼料として有望視されています。今後の普及には、低コスト化と牛への給与技術の開発が必要といわれ、TMRの活用が期待されています。

また、熊本県ではみかんなどの柑橘類の生産も多く、特に冬は果汁の絞り粕が多くです。この果汁絞り粕の飼料化については、九州沖縄農研や熊本県などが取り組んでおり、この絞り粕が牛にエネルギーを供給する良質な飼料として利用できることが明らかになってきました。みかんの絞り粕は酸化ストレスを和らげる成分「βクリプトキサンチン」が豊富に含まれていることから、夏の暑さの厳しい熊本で牛の夏ばてを防ぐ飼料としても期待されています（センターニュースNo.37参照）。

八代 TMR センターでは、これからも国産飼料とエコフィードを活用し、コスト面でも国際競争に負けない TMR 飼料の安定供給に努めていこうです。

【畜産草地研究領域 神谷 裕子】



八代TMRセンター飼料混合設備



飼料用イネの刈り取り



破砕した飼料用玄米



みかん果汁粕